

Title	「王弼の因循」傍注
Author(s)	湯城, 吉信
Citation	中国研究集刊. 1989, 8, p. 15-19
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61038
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「王弼の因循」傍注

湯 城 吉 信

王弼は『老子』の無為を「自然に因る」ということばで解釈している。また王弼は「因」という文字以外、「順」「任」「随」という文字も使っているが、以下これらをまとめて因循と呼ぶことにする。ただし、このことばは、現在の因循姑息というような意味ではない。

さて、因循は王弼の思想の基本として従来注目されてきた。その理由は、ひとつには、自然（の性）に因るということばが彼の『老子注』に頻繁に見られるという点、そしてもうひとつは、因循という考え方が『老子』に見られないものであることから、王弼がどのような思想から因循を持ち出してきて『老子』解釈に利用したのかという問題があるからである。とすれば、王弼の因循がどのような来源を持ち、どのような意味内容を持つ思想であるのかということ明らかにすることは、王弼の思想を把える有力な方法のひとつとなろう。

さて、王弼の因循思想は何に由来するのであろうか。この問題について、『莊子』に由来するという説が有力である。これ

は板野長八氏が「何晏王弼の思想」（『東方学報・東京』第十四冊之一・一九四三年）において述べている説で、以後、定論として受け入れられているようである。板野氏は次のように言う。

かかる（無為を以て因、循とする）見解は莊子に特徴的であることを思ふならば、王弼の老子註は莊子的な見解による老子の解釈なりと云ふことが出来よう。

板野氏は、王弼の思想の根底にあるのは『莊子』の齊物觀であると考えている。板野氏のように、魏晉の老莊思想流行の先駆と目される王弼に『老子』と『莊子』との結合が見られると考えることは思想史の流れとして自然である。

しかし、これに対して、沢田多喜男氏は、王弼の因循は『韓非子』主道篇に見える政治的な因循を普遍化させたものという新説を出している。

そこで本稿は、以上の新旧二論を中心に、王弼の因循の由来、内容について整理してみたい。

一、「老子」の無為と「莊子」の因循と

因循は道家の根本的な考えのひとつである。例えば、『史記』太史公自序に、「其（道家）の術は、虚無を以て体と為し、因循を以て用と為す」とある。しかし、『老子』本文には、「因」

「循」共に見えず、王弼の用いている「任」「順」「随」についても、順の字が一例、随の字が三例見えるに過ぎない。

ところで、金谷治氏に「無為と因循」（『東方宗教』二三・一九六四年）という論文があり、次のように述べる。無為は本来的には『老子』の思想であり、現実的効果をねらったしわざ的なものである（無為而無不為）のに対して、因循は『莊子』に特徴的なものであり、世俗的立場を完全に越えて、ひたすらに絶対的世界に冥合しようとする無私忘我の思想である、と。

『老子』に因循という考えが見えず、『莊子』に見えることから、一般的には、因循は『莊子』に特徴的な思想であると考えるを得ない。そこで『莊子』に見える因循を調べてみると、例えば、齊物論篇に、「因是」ということばが見える。

是に因るのみにして其の然るを知らず、之を道と謂う。（因是已已而不知其然謂之道。）

(1) 下の「已」字の上に「因是」が省略されていると見る説が一般的だが、ここでは下の「已」字を衍字として解釈した。いずれにせよ、文意に違いはないと考える。

(2) 「是」を、金谷治、赤塚忠両氏は、「これ」と訓むのに対

し、森三樹三郎、福永光司両氏は「ぜ」と訓んでいる。だが、共に是非の対立を越えた窮極の道（あるいは自然）と解する点では一致する。

また、齊物論「无適焉、因是已」の成玄英疏には「故に意を往来に措く所なし。物の性に因循するのみ」とある。この解釈は、『莊子』における因循が、万物斉同の立場から、絶対的な境地に身をまかせることであり、自分の意志や感情を滅したところに成り立つものであることを示す方向であり、そこには、現実的効果をねらう姿勢は見られない。『莊子』の因循は世俗を超越した高踏的なものという意味で、上述の金谷氏の論は首肯すべきであろう。

二、王弼の因循

それでは果たして王弼のいう因循は、上述した『莊子』の因循のように作為性のない消極的なものであろうか。

王弼は因循を聖人のとるべき態度として重要視している。

『老子』に見える聖人が無為なるものと述べられ、王弼はその無為を因循と解していることからして、王弼の聖人は当然、因循するという性格を持つことになる。この因循は聖人の一連の行動の中心に位置する。その聖人の一連の行動とはどのようなものか。

その一連の行動の第一歩は、因循する対象である自然なる物

の性を明らかにすることである。例えば、二十九章注に、
 聖人は自然の性に達し、万物の情を暢ぶ。故に因りて為さず、
 順いて施さず。

*「至」字を樓宇烈『王弼集校釈』（中華書局・一九八〇年）
 により、「性」字に改める。

と言ひ、四十七章の「是を以て聖人は為さずして成る」に注し
 て、次のように言う。

物の性を明らかにして、之に因るのみ。故に為さずと雖も、
 之を成さ使む。

ここに「物の性」とあるが、この「物」は、物全体という抽象的なものではなくて、各個々の個物という具体的なものを目指すものではないかと考へる。すなわち王弼は因る対象となる性を万物の個別的な性（分）と考へていたのではなからうか。もしそうであるならば、『莊子』の絶対的な道（自然）に因循しようとする立場と異なつてくるであらう。

さて、一連の行動の第一歩として、物の性を明らかにした聖人は、次にその把握した物の性に因つて適切な行動をとる。例えば、二十八章の「樸散ずれば則ち器と為り、聖人は之を用いて則ち官長を為す」に注して、次のように言う。

樸は真なり。真散ずれば則ち百行出で、殊類生ずること、器の若し。聖人は其の分散に因りて、故に之が為に官長を立て、善を以て師と為し、不善もて資と為し（『老子』二十七章「故善人者不善人之師、不善人者善人之資。」）、風を移し

俗を易え、復た一に歸さ使む。

聖人は、分散した殊類の実情に因り、官長を立て、民心を再び一に歸着させるのである。また、四十五章では、「大巧は拙なるが若し」に「大巧は自然に因りて以て器を成す」と注し、「大辯は訥なるが若し」に「大辯は物に因りて言ひ、己は造す所なし」と注している。また、四十九章注に「動くに常に因るなり」と言うように、因循は適切な行動をとるための前提条件なのである。

以上のように、王弼の言う因循とは、何もしない消極的なものではなく、その前に物の性を明らかにし、その後正しい行動をとるといふ一連の行動の中間に位置するものであり、積極性、作為性を帯びたものではなからうか。とすると、『莊子』の唱える因循と王弼の唱える因循とは、内容的に明らかに違いがある。この点において、板野説は再検討の余地があるといえよう。そこで次に、沢田多喜男氏の所論に注目したい。

三、『韓非子』の因循

沢田氏は、古くから『老子』と因循とを結びつけて考へる『老子』解釈があつたという。氏は前引の六家要旨の「其術以虚無為本、以因循為用」は、道家思想の中心である『老子』の思想内容について述べたものと考えられるからである。この場合の因循は同じ六家要旨に「因者君之綱也」と言われるように君子の政治的手段である。沢田氏はこのような因循が『莊子』的因

循ではありえないと考えたのであろう。そこでこのような因循が顕著に見られる例として『韓非子』主道篇を挙げている。それは次の部分である。

明君は上に無為にして、群臣は下に竦懼す。明君の道は、智者をして其の慮を尽くさしめ、君は因りて以て事を断ず。故に君は智に窮せず。賢者は其の材を效と（『校釈』の解釈の「效」に従う）して、君は因りて之に任ず。故に君は能

（「智者」の「智」の対として、「賢者」の「能（賢）」に窮せず。

ここに言う因循とは、君子が臣下を利用するという意味である。君子は臣下の能力を十分に發揮させ、それに因循して世の中を治める。そして、こういうしかたが『韓非子』のいう無為なのである。

沢田氏は、王弼の因循は、主道篇に見える政治的策謀的な因循だけでなく、より普遍的な因循を説くようになっているところに、思想としての進展が認められるとする。氏はその例として、二十七章注の「順自然而行、不造不施、故物得至、而無轍迹也。」や四十一章注、四十五章注を挙げている。

この沢田氏の説に従えば、王弼の因循の積極性を説明できると共に、無為と因循との結びつきも理解しやすくなる。『韓非子』においては、君子の術として無為と因循とが等置されているからである。

ところで『韓非子』と言えば、周知のように、『老子』の解

説である解老篇と、寓話によって『老子』のことは説明した諭老篇とがある。しかし、沢田氏はこの二篇と王弼の因循との比較はまだ行っていないので、私は沢田説に依り、その発展としてこの点を次章で考えてみたい。

四、『韓非子』解老篇、諭老篇と王弼と

解老篇では、現実的効果をあげるために物の道理に随うことが強調される。

夫れ道理に縁りて以て従事する者は成す能わざることなし。その随うべき道理について解老篇では次のように説明する。

万物各々理を異にして道は尽く万物の理を稽（合）わす。また、次のように言う。

凡そ理とは、方円短長蟲靡堅脆の分なり。故に理定まりて後に道を得べきなり。

すなわち、理は個物が生まれつき備えている個性（特殊）であり、道は万物の理を統べる原理（普遍）であると考えている。だが、道を把握するためにはまず万物の理を把握する必要がある。この点において、理は君子がまず明らかにすべきものである。だから解老篇では例えば、

物に先だちて行い、理に先だちて動く、之を前識と謂う。前識とは縁るなくして妄りに意度するなり。

とか、

動くに理を棄つれば、則ち功を成すなし。

というように、理を把握した上で、それに随って行動することが強調される。

このように、まず万物の個別的な理を把握してそれから行動するという考えは、王弼の物の性(分)を明らかにしてそれに随って行動するという考えと似ている。

また、解老篇では、次のように言う。

聖人は尽く万物の規矩(理)に随う。故に曰く、「敢えて天下の先と為らず。(六十七章)」と。

『老子』の否定表現を物の個性に因循するという意味に解釈する点で、解老篇と王弼とは一致する。

また喻老篇は、次のように言う。

物の容に因随するが故に、静かなれば則ち徳を建て、動けば則ち道に順う。……道理の數に随わずして、一人の智に学ぶは、此皆一葉の行い(人工的に葉を作り上げるような愚行)なり。……一人の力を以てせば、則ち后稷も足らず、自然に随えば、則ち臧獲(奴婢)も餘り有り。故に曰く、「万物の自然を待みて、敢えて為さざるなり。(六十四章)」と。

ここでも行動をとる場合に物の容(道理または王弼のよく使う自然という語も使われている)に因り随うことが説かれている。以上のように、王弼の言う因循は『韓非子』解老篇、喻老篇に見られる因循に似ている。すなわち、王弼と『老子』解釈である『韓非子』解老篇、喻老篇の因循との関係、あるいは継承の可能性といった問題があると考ええる。

以上、王弼の因循について、『莊子』に由来するという板野説と、『韓非子』の政治的因循の普遍化ととらえる沢田説とを検討し、後者の説に立った上で、さらに解老篇、喻老篇との類似を指摘した。

なお、王弼の『老子注』と『韓非子』解老篇とは、因循以外にも共通点がある。例えば、三十八章は、両者とも最も多くの注釈を施して重要視しているが、共に仁義礼の徳を容認する点で共通する。この両者の関係は、因循問題以外でも検討してみる必要があると考ええる。